『ヴェニスの商人』におけるポーシャの教養

高根　広大

1. はじめに

『ヴェニスの商人』において、男装したポーシャは裁判を執り行い、夫バサーニオの友人アントーニオを救う。さらには、シャイロックの遺産が、駆け落ちした娘のジェシカと夫ロレンゾーに渡るように、うまく議論を運ぶ。ポーシャ自身はバサーニオを夫として迎え入れる際、自分を「教養も学問も経験もない小娘」(3.2.159) と謙遜しているが、実際のところ、彼女はどうしてこのような驚くべき活躍ができたのだろうか。

本論では初期近代イングランドの教育論と比較しながら、まず、ポーシャの教養に当時の女性教育の制限が反映されていることを分析する。次に、ポーシャを演じた少年俳優と男性教育との関連から、男装の意味を考察する。続いて、箱選びの場面に見られる、女性の言語教育に対して抱く脅威を読み解き、最後に、裁判と指輪事件において、ポーシャの教養が導く喜劇的展開について論じる。

2. ポーシャの女性としての教養と制限

初期近代イングランドの代表的な女性教育論として、ファン・ルイス・ヴィヴェス (Juan Luis Vives) の『キリスト教女性の教育』(*Instruction of a Christian Woman*, 1523) がある。しかし、ヴィヴェスにとって、女性教育の目標は道徳教育であり、教育は女性を抑制し、敬虔で貞淑な女性を育てるための手段であった。また、『提言』(*Positions*, 1581) において、女性教育を積極的に論じたリチャード・マルカスター (Richard Mulcaster) でさえ、女性の教養を家庭的なことに制限し、女性が公的な場で活躍することを想定していなかった。

ポーシャの教養はこうした女性教育への制限をある程度反映している。実際、ポーシャは人肉裁判を計画する際、従兄のベラーリオ博士に助けを求め、手紙の中で「書類と衣服」(3.4.51) を求めている。このことは法学が本来男性社会に属するものであり、かつ女性であるポーシャにそれが欠けていることを示している。また、裁判の前に読み上げられるベラーリオ博士からの手紙には、ポーシャはベラーリオ博士の「見解を授かって」(4.1.155) いるが、裁判を行うにはあくまでベラーリオ博士の威光と推薦が必要であることが示唆されている。

材源の一つであるジョヴァンニ・フィオレンティーノ (Giovanni Fiorentino) の『イル・ペコローネ』(*Il Pecorone*, 1558) には、ポーシャに相当する人物であるベルモンテの貴婦人が登場するが、ポーシャほど教養に制限が多くない。貴婦人はポーシャと同様、法学博士の服に身を包むが、ポーシャのように誰かに頼る描写はなく、自分自身で解決する。もっとも、貴婦人が裁判で導く結果は、ユダヤ人が貸した 1 万ダカットの返済を無しにすることであり、ポーシャのように、財産の半分を没収し、それをアントーニオが駆け落ちした二人に贈る、きっかけを作るというようなことはしない。ポーシャは『イル・ペコローネ』の貴婦人よりも、さらに巧みな裁判の展開をする一方で、その教養もまた巧妙に制限されているのである。

3. ポーシャに表象される男性教育と男装の意味

ポーシャの教養に対する制限は、結婚に対する制限の中にも暗示されている。第 1 幕第 2 場で、ポーシャが父の遺言により結婚相手を選べないことへの憂鬱を吐露すると、ネリッサは過剰の弊害と抑制された幸福の価値を説く。遺言とネリッサの言葉は、ポーシャという女性に対する制限において、重なっていると言える。このとき、ポーシャがネリッサの言葉に対し、「いい格言ね、言い方も良かった」(1.2.10) と返しているのは重要である。これはグラマー・スクールの教師が、格言を習い暗唱する生徒を評価する言葉のようである。ポーシャとネリッサを演じていたのが少年俳優だということを考えれば、この場面はマルカスターが想定したように、女性の言語教育が男性教育と同様に行われる余地があることを示すものとなる。同時にこの場面は、ポーシャとネリッサがまだ学習途中であり、彼女たちの教育が完成されていないことを暗示する。

ポーシャが家を出て、裁判という公的な場で活動するには、男装することが求められている。しかし、たとえ男装しても、視覚的には少年俳優の身体に戻っただけであり、十分な学識と経験を備えた男性としては見られない。身体が視覚的に示す未熟さを補うために、ポーシャは喧嘩や恋愛の話などを吹聴し、男装だけでなく言語によってイメージを捏造しようと考えている。そうすることで、「学校を出てから一年以上になる」(3.4.75-76) と思わせ、修学中ではなく、一通り教育を終えたものとして見られようとしているのである。

4. 女性の言語教育に対して抱く脅威

ポーシャがバサーニオを夫として迎え入れる際、自身の教養のなさを表明している一方で、バサーニオは箱

選びの際、雄弁術に女性性を見出し、金の箱の装飾と重ね、非難する。その意味では、バサーニオは初期近代イングランドの教育論に見られる女性の雄弁術への危険視を反映していると言える。バサーニオにとって、化粧とかつらという女性に属する人工の美、すなわち「装飾」(3.2.97) は、蛇のたとえとともに誘惑的な「雄弁」(3.2.106) と同じものであり、視覚的な誘惑は聴覚的な雄弁術にたとえられている。このようなたとえは、材源の一つである『ゲスタ・ロマノールム』(*Gesta Romanorum*) には見られないことから、装飾と雄弁術の女性性に対するシェイクスピアの関心がうかがえる。

ヘザー・ジェイムズ (Heather James) は第五幕第一場のジェシカとロレンゾーの会話から、ポーシャに付与されたオウィディウス作品の女性のイメージと、オウィディウスの『恋の技法』(*The Art of Love*) に歌われるオルフェウスの音楽が、女性的な雄弁術と重ねられていることを指摘している (71-73)。『恋の技法』では女性の歌が海の怪物シレンにたとえられているが、声で誘惑し船乗りの男たちを海に沈めるこの怪物は、女性の聴覚的な誘いに対して男性が抱く脅威を示している。ポーシャが裁判で発揮する雄弁術は、シャイロックを「証文通り」という響きで誘い出し、海に沈めるシレンのようである。興味深いことに、女性の雄弁術教育を軽視したヴィヴェスは、オウィディウスの作品を女性に読ませるべきでない代表例として挙げている (Vives 23, 27)。

5. ポーシャの裁判と指輪事件

人肉裁判と指輪事件では、男性中心的な教育観から抑圧され、危険視されていた女性の教養が、ポーシャの活躍を通して喜劇的に描かれる。バサーニオは箱選びの際、法の場で悪の姿を不当に隠す「慈悲深い声」(3.2.76) を批判しているにも関わらず、人肉裁判ではポーシャに法を曲げるよう懇願する。ところが、ポーシャはバサーニオの懇願を退け、シャイロックが「証文通りに」という要求を繰り返すと、それを否定しない。気を良くしたシャイロックは何度も同じようにポーシャを讃えてしまう。シャイロックが追い詰められる最後の一打となったのは、証文に書いていないからとして、医者を呼ぶのを断ったことである (4.1.253-58)。ポーシャはシャイロックの明確な殺意を引き出すことで、殺人未遂の外国人が財産を没収されるという法律に言及する流れを作る。

ポーシャが女性的な雄弁術によって誘い出し、その罪を暴き出したのはバサーニオも同様である。バサーニオは、ポーシャが裁判の場にいると気づかず、アントーニオを救うために妻を失ってもいいと言ってしまう。ポーシャはこれをチクリと指摘して、観客の笑いを誘う (4.1.278-85)。第五幕でも、指輪をポーシャから受け取り、すべてを打ち明けられたことで、バサーニオは「君があの書記、で、僕にはわからなかったのか？」(5.1.280) と言う。このとき、バサーニオがようやく気づいたかもしれないのは、たんに彼女が男装して男性たちを救ったということだけでなく、ポーシャが示す女性の教養は男性の教養に劣らないばかりか、男性中心的な社会を支え、男性に女性への理解を教えることができるということである。

6. おわりに

本発表ではまず、初期近代イングランドの女性教育に対する制限に注目し、ポーシャの制限された女性教育と男装に伴う教養の演出を分析した。次に、バサーニオの箱選びとオウィディウス作品との関連から、女性の雄弁術教育に対して抱く脅威を読み取った。その脅威を体現したポーシャの雄弁術は、裁判でシャイロックを追い詰め、夫バサーニオの友人アントーニオを救い、ジェシカとロレンゾーの駆け落ちを後押しする。『ヴェニスの商人』という喜劇の面白さは、男性中心的な教育論で恐れられた女性の雄弁術が、箱選びを正しく選んだはずのバサーニオが危険視するのとは裏腹に、喜劇的展開を導くことにある。最後に、ポーシャはバサーニオに対し、結婚における男女の絆が男性同士の絆に劣らないということだけでなく、女性の教養もまた男性の教養に劣らない可能性があることを教える。観客はポーシャの男装の一部始終を見ることで、バサーニオに先駆けてそのことを知り、からかわれるバサーニオを笑いながら、2 人を祝福することができるのである。

引用文献

James, Heather. “Shakespeare’s learned heroines in Ovid’s schoolroom.” *Shakespeare and the Classics*, edited by Charles Martindale and A. B. Taylor, Cambridge UP, 2004, pp. 66-85.

Mulcaster, Richard. *Positions*. Edited by Robert Hebert Quick, Longmans, Green and Co., 1888.

Ovid. *The Art of Love and Other Poems*. Translated by J. H. Mozley and revised by G. P. Goold, Harvard UP, 1979.

Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*. Edited by John Drakakis, Bloomsbury Publishing, 2010.

Vives. Juan Luis. *The Instruction of a Christen Woman*. Edited by Virginia Walcott Beauchamp et al., U of Illinois P, 2002.

Waters, William, trans. *The Pecorone of Ser Giovanni*. Lawrence & Bullen, 1897.